

曹洞宗 蟠龍山 護国院 芳全寺

# 芳ほろれん蓮

2025 年新年号

持戒梵行はすなわち禅門の規矩なり

仏祖の家風なり

令和 7 年新年

No. 4



大本山永平寺不老閣猊下・南澤道人禅師拜問

[特集] 高祖大師御征忌  
於 大本山永平寺

# 「愛語廻天祖道風」

## 大本山永平寺御征忌「献供諷経焼香師」道中記

文 荒木 龍胤

車での永平寺までの道のりは高速道路が中心となります。自坊より片道五百七十キロ程あるのですが、内一般道路はほんの二十キロ程度です。今回の法要で侍者、侍香という大事な脇役を担当する直弟子、玲音、弘文宗師、そして檀信徒総代表として随行していただく村田國樹氏にも交替で運転をしていただき、ひたすら、高速道路を走っていきました。

焼香師本番を翌日に控えた九月二十五日は穏やかに晴れ、道路の交通状況も快調そのもの、朝五時半に自坊を出発し、途中幾度かの休憩、昼食をはさみ、午後一時過ぎには福井北インターを降りることができました。

思いの外、早く到着できたので、永平寺門前入口の茶屋（井の上さん）で休息をとっていると、本山總受処の参務和尚より店に電話が入ります。大事なお役目の焼香師の到

着状況の様子伺いといった所のようでした。上山、下山の折、当茶屋で道中着を着替えたり、一服したりする和尚が多いので、感を働かせたのですが、「どうしてわかったのかな？」と、とても不思議な感じがありました。

御征忌の期間中は全国より沢山のお寺さんがお手伝いに集まってきます（随喜といえます）。比較的近隣の寺院さんは、車で来山し、この茶屋の向かい側の大駐車場へ駐車し（お寺さんは大概無料で利用できるようです）、門前通りを徒歩で抜けて上山するのですが、今回は焼香師というたいそうなお役目を受けている関係上、有難いことに本山南端にある地藏院の下駐車場が利用できました。

永平寺總受処で本山献香料、役寮・大衆添菜（差入れ料）を納めて、焼香師の控室（焼香師寮・妙高台という一番奥まった所）へ



案内されました。お世話頂く係りの和尚様が重い荷物を運んでくださいました。

高坏に載せられた梅湯（砂糖湯に梅肉を入れて頂く疲れ癒しの飲み物）とお茶を頂き、まず到着帳に記載。それから明日の法要で唱える香語（お線香を拵じて法要に臨む所感を七言絶句の漢詩にしたもの）を香語帳に記載します。余談であります。この香語の作成というものが、押韻、平仄等かなりの専門知識を要し、なかなかの難関であります。全くその面での素養がない私のような者が準備の上で最も難儀するところでありました。

午後四時過ぎから静岡県の焼香師様がお勤めになる夕方の焼香師法要（晡時献湯諷經ほしけんとうふうぎんといいますが）が始まりました。焼香師寮は法堂のすぐ側なので、袖側よりそつと様子を見させていただき、明日の本番へのイメージを整えました。永平寺の法堂は地方寺院の三倍以上の大きさがあり、重厚な荘厳も加わり、場の空気が全く違い、居るだけで緊張してしまいます。いかにその雰囲気に吞まれずに冷静に務めるかが鍵となるでしょうか。

その後、此度の焼香師のお勤めを祝しての夕食（祝膳）を頂きました。焼香師への処膳として、一食分がこの「祝膳」という特別のものになるのですが、どのタイミングで出されるのかは、他の行事等との兼ね合いによるようです。様々な精進料理を盛りつけたお膳が二つ並び、専属の接待の知客和尚が接待役で目の前に付き添ってくださいます。一品一品、全て、「典座」という、食事の調理を司るお役目の和尚さんが心をこめて調理された料理となります。自分の口に入るまでの、その多くの手間や元々の食材の命、というものに思いを巡らしながら、有難く頂戴させて頂きました。その後、明日の本番法要へ向けての習儀（練習）をして頂きました。永平寺での法要、儀式はすべてが厳密なきまりの下に進行しますので、その中心的式師者である導師には、いい加減な我流は許されません。一挙手、一頭足、作法に沿った動き、細心の注意が求められるのです。茶、湯を献じるのに使用する茶湯器というお道具も永平寺のものは特大サイズであり、その重さも半端なく、侍者より受け取り、香に薫じる作法の時には

「愛語」とは、人を和ませたり、笑顔にし、  
他者との関係性を良い方向に廻していく力（廻天の力）

仏様の御心の本質である「愛」を行動指針とし、  
精一杯、世の為、人の為に我が命を活用していくこと

それこそ「気合と細心の注意」が必要です。進前焼香時の歩むスピードなどは、実際のお経のテンポ、法堂の広さとの兼ね合いでタイミングを取るのに慣れが必要なのですが、だいたい感じだけ確認するしかなく、後は天に任せることにしました。

翌朝は朝課、供養諷経法要の後、南澤道人不老閣猊下への拝問（ご謁見）を相見の間にて行いました。不老閣拝問のスケジュールはその日の猊下の都合によってどのタイミングとなるのか、それぞれのようです。入室すると、優しく柔らかな猊下が正装されて座っておられ、大変気さくに迎え入れて頂きました。現在、御年九十八歳になられるようですが、顔色・艶良く、お元気そうな様子で、何よりでした。

引き続き、小林昌道監院（永平寺の住職）老師への拝問を行いました。監院老師は隣の群馬県出身であられます。栃木県と群馬県の寺院は昔より交流も盛んであり、いわば、「同郷の志」的親密感を覚えました。

担当する本番の午時献供諷経は十一時過ぎからの開始となりました。永平寺は穏やかな晴天に恵まれ、衣、袈裟と重ね着をし

ている身には少し汗ばむくらいの陽気で、場内には開式の状況を知らせる殿鐘という鐘が澄んだ音色を響かせていました。

殿鐘が二会目になると次々に大衆が上殿し、広い法堂が沢山の僧侶衆で埋め尽くされていきました。殿鐘三会が打ち上がる

と、いよいよ導師の上殿となります。先導師老師様に先導され、目線を一畳ほど前に落とし、厳かに静々と進んでいきます。この時、殿鐘と送迎引磬が等間隔で鳴らされ殿鐘七声目で法堂大間への上殿、合掌低頭

となります。高祖様（道元禪師）の像の前の簾が上がりきるまで低頭の状態を保つのですが、このところめつきり耳が遠くなったせい、本来「カラカラ」と聞こえるはずの簾を上げる音が全く聞こえません・・・しかたなく、三、四秒程間を

とり、拝敷へと上ります。侍者より差し出された大香を注意深く拈じ、香語を唱えます。永平寺では基本、マイクを使用しませんので場内に響くよう、少々張り上げ気味で精一杯重厚な口調で唱えます。

愛語廻天祖道風

慈恩浩大太圓通

仰欽高祖無量徳

三昧光明一炷中

愛語、天ヲ廻ス祖道ノ風

慈恩、浩大ニシテ太圓ニ通ズ

仰欽ス、高祖無量ノ徳

三昧光明、一炷ノ中

おもむろに進前し、香を焚き、戻って全員で高祖様に対して三拝します（普同三拝といひます）

三拝終わって導師は坐具をそのままにし、再び進前し、高祖様に湯・菓・茶を献じる儀式、「献供」を行います。侍者和尚から受け取ったそれぞれの供え物を丁寧な香に薫じ、

侍香和尚に渡します。全ての供え物が供え終  
わったのを確認し、自位に戻って導師のみ再  
び三拝します（献供三拝）。この時、お拜に  
合わせて大磬三声し、同時に読経するお経  
本が全員に配られます（但し導師には配経は  
なし）。後、「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」  
の読経が開始されます。読経が始まると  
小磬七声に応じて導師は再度進前焼香  
し、自位に戻り合掌低頭すると同時に大磬  
一声、「行道」という、うねり歩きながら  
の読経が開始します。これを一般の寺院で  
する場合には「コ」の字型の二本折れで行  
うのが通常なのですが、永平寺では七本折  
れ、という、幾重にも折れ曲がって練り歩  
く形でするので、響く読経の声と相まって、  
実に清らかな空間が現れ、法要の醍醐味、と  
いうものを感じました。理屈抜きに「あり  
がたい」と感じる体験となりました。「行  
道」が二巡すると、元の導師位に戻り、読  
経を続けます。読経が終盤に差し掛かり、  
ある個所に至ると大磬に合わせて進前焼香  
し、自位に戻ってお経の終わりの合図の小  
磬に合わせて坐具を展じ、導師のみ三拝に  
入ります。維那和尚さんが唱える「回向」

という言葉のそれぞれの決まった箇所  
に合せて導師は三拝するのですが、なかな  
か難しいですね。最後にもう一度進前焼香し、  
皆と一緒に三拝し、法要は終了、下簾が終わ  
るまで導師は低頭して待つのですが、やは  
り全く音が聞こえません。しかたないので、  
だいたいの感じで切り上げさせて頂きました。  
送迎、先導師様の迎えに応じて静々と  
退場して、無事お役目が終了となりました。  
さて、法語「愛語、天ヲ廻ス祖道ノ風」  
についてですが、道元禅師様が御著書  
「正法眼蔵」の中で説かれている四つの行動  
の法「四摂法」の中の一つ「愛語」に依ります。  
暖かいところで語りかける慈愛の言葉を  
「愛語」といい、人を和ませたり、笑顔に  
し、他者との関係性を良い方向に廻してい  
く力（廻天の力）であると説かれています。  
道元禅師様がこの「四摂法」布施、愛  
語、利行、同時の四つを通して示した  
かったのは、結局のところ、仏様の御心  
の本質である「愛」の尊さ、大切さで  
あり、その祖風を受ける私たちは、こ  
の「愛」を行動指針とし、精一杯、世の  
為、人の為に我が命を活用していくことが

求められているように感じています。是非皆様もこの「愛語」というものを日々  
こころがけられてはいかがでしょうか。

合掌  
蟠龍山芳全寺住職 荒木 龍胤



# 高祖大師御征忌 於 大本山永平寺

記 荒木 玲音

9月25日〜26日にかけて、

福井県の曹洞宗大本山永平寺へ行ってまいりました。曹洞宗開祖道元禅師を偲ぶ報恩行持として行われる「御征忌」にて、南澤道人禅師に代わって「焼香師」の大役を師匠が務めるためです。

永平寺には今回で3度目の拝登です。1度目は中学生の頃、師匠と二人で旅行がてら、2度目は令和4年1月に瑞世ずいせという一人前の僧侶になるための最終儀式にて、そして3度目の今回が御征忌です。

前回は私自身の儀式ということで頭が一杯で、祖山の空気も、法要の雰囲気も味わう余裕もなく、時間があっという間に過ぎ下山しました。





## ～永平寺山内での流れ～

初日 (9月25日)

- ・ 14:30 上山 諸堂拝観
- ・ 17:00 薬石 (夕食)
- ・ 18:00 進退習儀 (本番の確認)
- ・ 19:15 入浴
- ・ 21:00 開枕 (就寝)

二日目 (9月26日)

- ・ 3:30 起床
- ・ 4:00 暁天坐禅 (早朝の坐禅)
- ・ 5:20 法堂朝課 (最初のみ)
- ・ 5:50 不老閣猊下拝問
- ・ 6:05 監院老師拝問
- ・ 6:45 小食 (朝食)
- ・ 11:00 高祖大師献供法要
- ・ 12:20 中食 (昼食) 後下山



一方で今回は経験を積んできたこともあり、永平寺での非日常の体験を五感で感じ取り味わう余裕がありました。暁天坐禅での静寂と秋の虫の声、法堂の空気の重さ、100人以上の僧侶が集まって唱える読経の荘厳さ、素材本来の旨味を最大限に引き出した食事、修行僧による管理が行き届いた境内の景色等。

今回の焼香師の大役を務めるに当たり、師匠は相応の準備を重ねてまいりましたが、プレッシャーは相当のものであったと思慮します。その中で最後まで務めきることができたのは日頃から当寺を支えてくださっている檀信徒の皆様の支えがあつてのことです。この経験をもとに檀信徒の皆様、ならびに芳全寺の末永い発展に尽力致します。

徒弟 荒木玲音 合掌

# 緊張に満ちながらも、茫洋として澄み切った僧侶たる表情そのものだった。

## 随記

## 御征忌法要

## 大本山永平寺

日本全国に一万八千ヶ寺ある曹洞宗の総本山である永平寺。そこで行われた御征忌法要は何と、七日間行われる。ハイライトである高祖大師献供は、曹洞宗のトップである南澤禅師に代わり、曹洞宗の開祖である道元禅師に供物をささげる法要である。従える僧侶は、優に百人を超える。今回、荒木龍胤住職は、栃木県曹洞宗百八十ヶ寺の代表として、この法要の導師という大役を行いました。場所は、永平寺、法堂、芳全寺の3倍はあろうかという建物。真ん中に本尊。両脇に、縦に6人の僧侶が8列並び、その後方に、5,6列の僧侶が控えている。開始の鐘が鳴る中、荒木住職が弟子である玲音宗師と弘文宗師を従え入場しました。令和6年、9月26日木曜日、午前11時15分、法要は静かに始まりました。

大役を終えた荒木住職に顔見知りの僧侶達が次々と両手を合わせ近寄ってくる。「本日はおめでとうございます。」荒木住職もほっとした表情で両手を合わせる。「始まる前の表情と全く違いますね！」今回、法要に同行した本郷地区の荒川さんご夫妻の奥様がふと漏らした言葉に、私も深くうなづきました。

「緊張した人の表情」 次の試合に勝てば決勝進出！目を輝かせ今にも走り出しそうな勢いに満ちた若者の緊張感。それとは違う。そうかといって、不安のあまり白い蠟燭のよう、血が失せ、固まってしまった冷たい表情、これとも違う。入場してきた荒木住職の表情は、一見、茫洋として捉えどころがなさそうで、しかし、一步、一步、進む度にしっかりと前を見て前進し、今から何をなすべきか、確かに見据えていた。そう思えた！法要の途中に膝を折り、床にひれ伏して頭を床に付けたまま、両手の平をささげ「道元禅師様どうぞこの両手にお御足をお乗せ下さい」と繰り返す。立ち上がり、今度は100人を超える

僧侶達の先頭に立ち、お経を唱えながら本堂の中をジグザグに練り歩く！初めて見る厳粛で壮観な法要、これを導く導師としての重責は如何ばかりかと思う。

帰り際、栃木県芳全寺荒木龍胤老師という掲示物を見る。せんだん幼稚園から同級である私は「老師」という表現に違和感を覚える。70歳を超えたから老師か？そうか！今回の大役は、老師でなければつとまらないのだ！20代からかれこれ50年もの時間を住職として功德を積み、研鑽を重ねてこそ、あの緊張感の中、導師が出来るのだ！今回の旅で一番良いものを見た。それは御征忌法要に入場する荒木住職の緊張に満ちながらも、茫洋として澄み切った僧侶たる表情そのものだった。

檀徒総代 村田國樹 合掌





# 道元禅師って どんな人？



## 3 悟りと帰国

- # 曹洞宗を開いたお坊さん  
こうそじょうようだいし
- # 高祖承陽大師と尊称されている
- # 如浄禅師の下で悟りを得る
- # 帰国し、万人に坐禅を広める

### 前回までのお話

「他の者にさせたのでは自分の修行にならん  
今せずにいつするといふのだ」と一喝した典座  
老師との出会いで修行の本質を悟った道元禅師  
は、その後宋国のお寺を巡る中で、正師となる

- 如浄禅師と出会いました。高潔な禅者である如
- 浄禅師に疑問や質問を全て投げかけ続け、また
- 如浄禅師も道元禅師に親しく教えを説き明かし
- ていた中で、得た教えとは何か？

### 坐禅中に・・・

ある日、道元禅師がいつものように早朝の坐  
禅をしていた時のことです。師である如浄禅師  
は坐禅中に居眠りをしていたある僧を厳しく叱  
り、「坐禅は常に身心脱落でなくてはいけない  
のに、このように眠りこけてどうするといふの  
だ！」と一喝されました。この言葉を聞いた道  
元禅師は身も心も全ての囚われから解放され、

- ぎょうじゅうざが 行住坐臥（≡日常の立ち振舞）全ての行いがそ  
のまゝ仏の姿の表れであるということ深く悟  
られたのです。その後道元禅師は、如浄禅師か  
ら印可証明（悟りを得て、歴代の仏祖の教えを  
余すことなく受け継いだという証明）を受けた  
のです。

### 宋国修行を終え ついに帰国

帰国して3年程京都の建仁寺におり、そこで  
坐禅の作法とその重要性をわかりやすく万人に  
説いた『普勸坐禅儀（ふかんざぜんぎ）』を記  
されました。やがて1230年には深草の安養院  
に移られて、三年程過ぎされました。この時期、  
『正法眼蔵・弁道話（しょうぼうげんぞう・べ  
んどうわ）』を著し、お釈迦様以来伝えられた  
仏法の基本は坐禅であり、悟りを得るといふ目

- 的を持つての坐禅ではなく、坐禅そのものが悟  
りの姿であるという『修証一如（しゅしょうい  
ちにょ）』の教えを示されました。
- 1223年、道元禅師34歳の時、京都の深草に  
最初の道場となる興聖寺を開き、のちに永平寺  
の二代住職となる懐奘（えじょう）禅師を弟子  
としました。しかし、道元禅師の台頭を良く思  
われない旧勢力からの圧力がかかり・・・

次号へつづく

## 教師と僧侶

五〇代からの挑戦  
(後編)

芳全寺徒弟 荒木玲音 32歳  
 東北大学卒・玉川大学卒  
 一般企業に勤務後、  
 令和3年大本山永平寺別院  
 長谷寺にて安居  
 仏教を分かりやすく伝えるため勉強中  
 保育教諭として年中児担任も務める

今回の対談は前号に引き続き、私の修行同期であり、当時の修行僧の中で最高齢である53歳で修行を満了した、市貝町海福山慈眼寺住職の國井弘紀師です。

今回は現在も教師として活躍する弘紀師に、これからを生きる世代に伝えたいことを聞いていきます。

### 剣道と禅の共通点

徒弟玲音（以下玲音） 弘紀さんは今も真岡女子高校で非常勤としてお勤めされているんですよ？ 剣道部の顧問も務めていたと確か記憶しておりますが。

國井弘紀師（以下弘紀） そうです、修行を終えた後も御縁を頂きました。剣道の良いところが、お互いにリスペクトしあえる、ということですね。何事も

もそうですが、特に剣道はそれを感じ、生徒と指導者という立場を越えてリスペクトし合う関係ができてきました。

玲音 私は剣道の経験はないのですが、有名な言葉はよく耳にします。例えば「守破離」「一意専心」など調べると剣道でもよく使われる用語なのでね。

弘紀 そうなんです、修行を通して剣道と禅の共通点を感じたこととして、まず「言葉が難しい」こと。禅では不立文字（文字や言葉による教義の伝達のほかに、体験によって伝えるものこそ真髄であるという意味）と言われるますが、経典からもそうですし、道元禅師の残された書物から多く学ぶ機会も修行中は多かった。一方剣道の用語も似たように一見難解に感じることも。それが、お互いにリスペクトしあえる、ということですね。何事も剣道と禅の共通点だと感じ

ました。

**玲音** いぎせきくぶつぼう **威儀即仏法** さほうこれしゅうし **作法是宗旨**

（日常生活の身なりや立ち居振る舞いは全て仏の道であり、これが曹洞宗の教えであるという意味）です。確かに剣道も威儀を大切にしていると感じます。これまで長く教師として若い世代の方に相対してきた中で、いつも大切にしている伝えたいことはありませんか？



## これからの世代へ

**弘紀** 悩みの相談もよく受けるのですが、一貫して伝えているのは「自分が自分の人生の主体であること」「リアルをつなぐりを大切にすること」、これらは核として伝えていきます。

一点目は葬儀の場でも伝えているのですが、そこでは故人に振り回されないこと。残る者がどう生きていくかが、どう善行を積むかによってそれが追善となって供養になる、ということ。最後は本人次第なので、周りに振り回されず自分の人生の主体であるようにと少々手厳しいですが伝えていきます。自分の人生の主体であるために「自分で決める事」も大切だと伝えていきます。

**玲音** 「じゃあ具体的にどうすればいいの？」となりませんか？



国井弘紀（くにい こうき） 57歳  
海福山慈眼寺 住職

県立盲学校、県立博物館研究員、教育委員会、県内高等学校（真岡・茂木・真岡女子）等での勤務を経て、令和3年大本山永平寺別院長谷寺安居、慈眼寺の住職となり現在に至る。

**弘紀** なりますね笑。なので二点目にもつながるのですが、こういうネット全盛の時代だからこそ、リアルにつながりを大切ににし、今自分の周りには何があるか、どういう関係になっているか、見つめ直して一日一日を丁寧<sup>ていねい</sup>に過ごすこと。その中で自分自身でどう考えるか、その姿を支えていく立場として向き合うようにしています。

**弘紀** まさしくそう感じますね。こういう話をする以上私たちも同じ教育者として僧侶として体現しなければなりません。

**玲音** 全く同感です。「自分の

**玲音** 「日々是好日<sup>にちちこれこうじつ</sup>」に通じますね。私たちの人生も、一日一日、一瞬一瞬を無駄にすることが出来ず、大切に生きなければ

お時間を頂き、ありがとうございました。

いました。

完



②大本山永平寺参拝

③道元禅師御征忌・報恩法脈会



←法要の様子

①大施餓鬼法要

**特派布教会**

令和六年六月十日、栃木県宗務所主催の特派布教会（教場・鶏足寺）に住職と徒弟の両名で参加してきました。

北海道正覚院住職の松村老師によるご法話からご縁の大切さ、今日の前にあるものを活かす大切さを学びました。

**道元禅師御征忌**

**報恩法脈会**

令和六年一〇月二七〜二九日の三日間、大本山永平寺別院長谷寺にて、道元禅師御征忌報恩法脈会が催され、住職と徒弟の両名で随喜して参りました。今回住職は御先導師という役目で法要の導師様をお連れする役を、徒弟は受処詰という役目で主に行持の運営を行う裏方として務められました。永平寺に続いて東京別院でもこの御征忌を通して、自らが正伝の仏法を学び、行じることができました。合掌

**大施餓鬼会**

令和六年八月七日、大施餓鬼法要を教区ご寺院様ご協力のもと営みました。ご参列頂けなかった方のためにも当日の様子を記録に残しました。ぜひご覧ください。

**大本山永平寺参拝**

御征忌のため拝登したことに加え、全国曹洞宗祖門会会長会議に住職が参加し、永平寺の運営や護持について議論をしてまいりました。境内を周った時の様子も動画にしましたので、ぜひご覧頂き空気を味わって頂けたらと思います。

**社会貢献活動**

当山では社会貢献活動としてボランティア活動や非営利団体への支援を継続して行っています。

- ・おてらおやつクラブ
- ・公益社団法人ハタチ基金
- ・認定NPO法人キッズドア等



1周忌	令和6年(2024)逝去
3回忌	令和5年(2023)逝去
7回忌	平成31年(2019)逝去
13回忌	平成25年(2013)逝去
17回忌	平成21年(2009)逝去
23回忌	平成15年(2003)逝去
27回忌	平成11年(1999)逝去
33回忌	平成5年(1993)逝去

※休日は混み合いますので、お早めにご相談下さい。

**編集後記**

寺報「芳蓮」第四号をご覧頂きありがとうございます。今回は大行持である永平寺御征忌焼香師の記録を兼ねて通常よりボリューム増でお届けしました。インターネットが発達した現代でも、この焼香師を務めるにあたって情報がほとんど無く手探りであったため、なるべく詳細が分かるよう、空気をそのままギョツと閉じ込めたつもりです。

永平寺への団体参拝は残念ながら開催できませんでしたが、一人でも多くの方にご覧頂けたら幸甚です。

荒木玲音